

---

# 無力な自分

契聖 朔冬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無力な自分

### 【Nコード】

N3280E

### 【作者名】

契聖 朔冬

### 【あらすじ】

好きな人でさえ護れないでいる俺はなんて無力なんだろうか。今も大切な人が俺に助けを求めているのに何もできていない。

**(前書き)**

イジメ描写ありです。苦手な方は気をつけて下さい。

どうして俺には何も出来ないんだろうか。  
後悔するぐらいなら殴りかかれれば良かったのに。  
後悔すると解っていて連れ出す事しか出来ない自分。  
無力すぎる……。

\*

葵先輩と知り合って数週間経ち、更に葵先輩を虐めてる現場に行  
って数週間が経った。

四月も終わり、五月の真ん中。

じめじめとした暑さに俺は隣の人物……葵先輩を見た。

葵先輩は黒く長い髪をポニーテールにして机に突っ伏して寝てい  
る。

寝返りをうち、顔を俺の方に向ける葵先輩。

長い睫毛に淡いピンクでふっくらとふくらんだ唇。白い肌には暑  
さからか、汗が出ていてうなじを伝う。

俺は慌て首を横に振った。

「襲いたって思うなんて……」

ぼつりと呟いた言葉と共に、葵先輩は小さく欠伸をしながら起き  
た。

まだ眠たいのか、目をこすっている。

「おはよおー……」

眠たそうな声で挨拶する葵先輩に優しく微笑みながら

「おはようございます」と言った。

葵先輩は携帯で時間を確認すると、お弁当を持ってどこかに行っていました。

表情が暗かったのは気のせいだろうか？

俺がどうしたものかと考えていると、翠先生が現れた。

「時間が経っても葵先輩が帰ってこない場合は、葵の教室まで行って下さいね」

俺は首を傾げる。

「どうしてですか？」

冷たい瞳で俺を見据え、低い声で囁く翠先生。

「お忘れですか？先日、起こった事を」

その声には俺は背筋が凍った。

「覚えています」

翠先生は微笑むが、目が笑っていない。

「お願いしますね」

翠先生はそれだけ言うとお出で行った。

俺は翠先生が出て行きながら呟いた言葉を聞き、怒っていると確信した。

・理由も知らない子供がふさげた真似をしてくれませぬ……。

そう、翠先生は呟いた。

俺は課題をしながら葵先輩の事を考える。

あの先輩は大丈夫なのだろうか。なんでも溜め込んで我慢して、泣かないでいる。無理して笑い、変な意地をはって……。

「いつか壊れなきゃいいけどな……」

俺がそう呟いて課題に手をつけた。

数十分しても戻ってこない葵先輩に、嫌な予感がした。

もしかしたらと思い、俺は慌て葵先輩の教室に向かう。

教室に着くと笑い声と悲鳴が聞こえた。

その悲鳴は明らかに葵先輩のもので、俺は教室の扉を開ける。

「っ……ひっ……止めてっ……!!」

「あははっ！水無月は遊び人なんだろ？」

「ちが……う……や……!!」

目の前で繰り広げられている光景に、俺はさらに啞然とする。

葵先輩が押し倒され、制服を乱されていた。

「!!」

葵先輩は俺と目が合った瞬間、涙を溜めた瞳を見開き、固まった。

そして口パクで

「助けて」と言った。

「葵先輩に何しているんですか……」

俺の言葉に、男子生徒が笑う。

「水無月が遊び人だから襲ってるだけだ。悪いか？」

その言葉に、俺は男子生徒を睨みつけた。

「葵先輩の事情も知らないくせになに言ってるんですか」  
「はっ！男性恐怖症なんて嘘だろ」

その言葉に、俺は言い返す。

「葵先輩には証明曙がありますから、嘘ではありませんよ」

男子生徒は悔しそうに唇を噛み、そして無理矢理、葵先輩にキスをした。

葵先輩が抵抗する前に、彼岸先輩が男子生徒を蹴っ飛ばした。  
男子生徒は壁にぶつかる。

「お前らがこんなことするから葵が怯えるんだろうが」

黒髪をオールバックにし、前髪を数本たらしめている目つきが鋭い先輩……黒月先輩がため息をつく。

「鬼吉、暴れるか……」

赤髪でざんばら髪でこちらも目が鋭い先輩、セキルイ汐浜先輩はニヤリッと笑う。

「ったりまえだ。いいかげん、腹立ってたんだよ」

俺は葵先輩に近寄りブレザーをかけた。

葵先輩は俺に抱きつきながら

「恐かった」と呟いたのを聞いて悔しかった。

俺はなにもできていない。好きな人さえ護れていない……。

「遥君…ありがとう……」

葵先輩の嬉しそうな笑顔に、俺は胸の奥が痛んだ。

「遥、葵を連れて保健室に行け」

彼岸先輩の言葉に頷き、俺は葵先輩を姫様抱っこして保健室に連れていった。

\*

葵先輩はひたすら怯えて口を開こうとしなかった。ただどゆっくりと喋り始める。

「教室に行ったらね、『水無月さんは先生騙して同居してるんだよね』って聞かれて、私が違うって言ったら髪の毛引っ張られたり叩かれたりされて……後…コレ……」

葵先輩は襟元を下に引っ張りうなじを見せる。そこには赤い痕がついていた。

「…遥君…恐かった……！」

半泣きになりながら俺に抱きついた。

「わ…たし…男なんて…嫌い…！大嫌い…！遥君…わかん…な…やだあ…」

葵先輩の言葉を聞きながら俺は、ただ無言のまま葵先輩の背中を撫で続けた…。

何もできない自分を罵りながら…。

なんて無力なんだろうか。

なにもできない。

好きな人が傷つき、涙を堪えているのに 俺はなにも言えない。  
無力過ぎる…。

葵先輩。

俺は貴女になにもしてあげれません。

優しい言葉もかけません。

貴女が傷ついているのに俺は助けることもできません。

こんな無力な自分を赦してください。

なにもできない自分は、愚かな自分は、  
無力な自分は

貴女の傍にいていいですか？

俺は無力な自分を罵りながらも

俺は貴女の傍に………。

(後書き)

契聖 朔冬です。この度は『無力な自分』を読んでいただき、ありがとうございます。サイトにアップしていた小説を、もっと多くの方に読んでいただきたかったので編集をして、書き上げてみました。最後の方が変だと思つのですが…どうでしょうか…？とりあえず、気に入って下されば幸いです。次はこの二人のお花見話でも編集して、書き上げてみたいです。それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3280e/>

---

無力な自分

2010年10月21日22時00分発行